

## 《研究ノート》

## 意志作用は幻想？

大庭 健\*

向日葵は太陽へと向きを変え、鮎は、縄張りに闖入した他の鮎を攻撃する。これらの動きは、外界からの刺激にはじまる連鎖を辿って因果的に説明されるだけでなく、それぞれ、効率的な光合成の「ため」、適正な個体密度を保つ「ため」というかたちで目的論的にも説明できる。しかし、目的論的に説明できれば、目的を志向した**意図的行為** (intentional action) だということにはならない。

試みに、ごくありふれた行為と対比してみよう。目が覚めて、すぐ起きるかどうか迷ってあれこれ思案した末に、やはり起きようと思い、幸い体のどこもマヒしておらず、思ったとおり起床した。思案の末のこの起床行動が、向日葵や鮎の動きとは違って意図的行為だ、ということは否定しがたい。では、どこが違うのか。すぐ目につくのは、体が動くまでの過程で、思案の余地、選択ないし決断の余地があったか、という違いである。向日葵に、太陽を追うか否かを思案し選択するとは思えないし、鮎が、攻撃するか否かを思案するとも考えにくい。

こう考えると、私たちの振舞いであっても、生理的な反射や、寝言に類する非覚醒状態での動作などは意図的行為ではない、習慣化した自動的な振舞いも、意図的行為に達していないとさえ思えるかもしれない。たしかに、生理的反射と非覚醒状態での振舞い、そして習慣化した自動的な動作

---

\*専修大学文学部教授

と続くスペクトルを明確に区切るのは、心理的にも神経生理的にもかなり厄介かもしれない。しかし、それらの境界の複雑性がいかにまれ、「思案」「選択」を有意味に語れるか否かの違いがあることは否定できまい。

もちろん「思案」「選択」という概念を、行動主義的に定義してしまうのなら話は別である。つまり、およそ目的論的に説明できるかぎり、“複数の選択肢が開かれている”という内容を伴う、状況にかんする信念を、当該個体に帰属させ、そうすることによって当の振舞いへの過程には「思案の末の決断」があったと言う、とでも約定すれば、魷の振舞いも、睡眠時の寝ぼけた行動も、すべて「思案の末の決断」による行為だ、と言えるかもしれないし、ひいては台風や地震が一定の経過をたどって甚大な被害をもたらしたことも、ガイアが「思案の末に決断」した行為だということになるかもしれない。

しかし、そうした行動主義的な還元は、説明を与えるよりも、むしろ問題を消去するに等しい。それはあたかも、人がいるという事実を、身体の素材となる物質の存在に還元することによって、“生死の違いは、じつはない”と語るのにも似て、一見洗練されている印象を与えはしても、所詮、粗野な反知性主義でしかあるまい。

## 1. 意志作用 (Volition) という概念

そこで右で「思案」の末の「決断」と呼んだ過程を、もう少し分解能を上げて描いてみると、次の因子が析出してこよう。

1. するのもしないのもありうると思う——「未来は開かれている (open 未決だ)」という信念<sup>1</sup>,
2. どちらがいいのかを考える——選択肢の比較・考量,
3. どちらかをすると決める——考量にもとづく選択ないし決断,
4. 決めたことを行う——選択したことの実行。

これらの因子は、すべて常識・通俗心理学の用語によっているので、神経生理学の用語で行動主義的に還元しようとする方々の不信ないし軽侮を招くかもしれない。しかし、これら諸概念は、少なくとも現段階では、私たち自身の自己理解・他者理解にとって不可欠であり、その有意味性を否定することは、場合によっては無責任な二枚舌の正当化になりかねまい。

それはさておき、これらの因子のうちのどれが欠けても、十全な意味での意図的行為にならないように思われる。まず1の未来は開かれているという信念の余地がないなら、「選択」という概念は空虚だろうし、2の選択肢の比較・考量が不在なら、そこでは熟慮ないし実践推論は遂行されず、ランダム事象に帰着しよう。そして、3の選択がなされないなら、延々と小田原評定が続くだけだろうし、4の「選択・決断したことの実行」が不在なら、選択し決断したのとは違う動作・振舞いが生じるという非合理事象にしかなるまい。

そして、意図的行為にとってもっとも重要なことは、四因子をともなう過程が、「我思う」というより「我行う」という、当事主体による一人称思考として進行することである<sup>2</sup>。もちろん、つねに自覚的・意識的にそう進行するとは限らない。むしろ、習慣化し自動的とみえる行為や何気ない行為にあっては、そうでないほうが普通であろう。しかし、もし、事後的にであれ、どんな寛容な解釈をもってしても、右の四因子からなる一人称での思案・決断を、本人自身が認めうる仕方で、振舞った個人に帰属させることが不可能ならば、その振舞いは意図的行為に達していない、といわざるをえまい。

このように、これらの因子は、意図的行為にとっていずれも必要条件であるが、それらの概念的な貢献は一様ではない。四つのうち、未来の未決性の信念と、選択肢間での比較考量という二つの因子は、意図的行為に固有の因子というよりも、むしろ選択ないし決断、および実行が有意味となるための条件のように思われる。そうだとしたら、意図的行為にとって本

質的なのは、**選択的に決断し・実行**するという能動的作用であり、これらが作動しているかぎり、諸種の入力や記憶を前にした信念の形成や、長期的な計画の策定なども、広義では意図的な「内的」行為と考えるかもしれない。

「内的」行為はさておき、意図的行為にとって本質的な特徴が、選択し実行するという能動的作用だとしたら、それらを「意志」の概念のもとに一括し、その働きを「意志作用 (volition)」と呼ぶことに大きな誤りがあるとも思えない<sup>3</sup>。そうすると旧弊なようだが、意図的行為の本質は、意志作用だと言えよう。もちろん、ここでは意志作用は、諸因子が一人称思考として関連しあって意図的行為を構成する際の能動的特徴を総括する概念であって、必ずしも物理的な作用のように、特定の時点に物体間で作動すると限定する必要もない。こうした留保のうえではあるが、行為の意志作用説 (volitional theory of action) は、自然な考えだと思える<sup>4</sup>。

しかし、現代の哲学では、行為の意志作用説は“下火”なのを通り越して、かなり冷やかな上から目線の対象と化している。そこに見られる冷淡さ・憐憫・蔑視は一樣ではないが、標的や強さの違いこそあれ、共通に見られるのは、行為の因果説 (causal theory of action) であり、その延長上で登場してくる意志作用の**随伴現象説** (epiphenomenalism) である。

予め要約的に言うと、こうなる。いわく、右で「**選択的な決断**」とか「**実行**」と呼ばれているのは、欲求・信念という心理的事象が、身体的振舞いを引き起こす因果作用であって、この因果作用に加えて「意志」という別個の心的作用が働いているのではない。よって意志は、名目上の存在、実質的には「遊び車」にすぎない、云々。(ちなみにここで興味深いのは、行為の因果説の最有力な提唱者が、「意志の弱さ」の問題に頭を悩ませてきたことである)<sup>5</sup>。

こうした行為の因果説の先には、あからさまな余剰説が待ち構えている。いわく、身体運動を引き起こすのは、信念・欲求だとされているが、実際

には脳からの指令であって、信念・欲求をはじめ心理状態は、脳の働きに随伴して生じる主観的な現象（随伴現象）にすぎず、身体運動を引き起こす因果的効力をもってはいない。したがって、「意志作用」という語は、事態の描写から消去可能である。ちょうど、「パターン××の神経細胞興奮」といった神経物理言語だけを残して色言語を消去しても、事態の描写がなんら損なわれないのと同様に、意志作用言語は消去可能だ、ということになる、云々。

こうして現代では、行為の意志作用説は、あたかも一八世紀のフロジストン（燃素）説や近世の魔女説と同様の、錯誤や迷信の鬼火のように扱われる。これは、日々の常識からすると、きわめて面妖である。しかし面妖ではあるが、まったく理解不能でもない。日々の感じのなかでも、自分の意図的な行為にかんしてさえ、ときには「ほんとうに自分の意志でやったことなのだろうか」といった類の違和感を抱くことは珍しいことではない。そうした違和感だけを元手に詰めていけば、その延長上に、意志作用は虚妄だといった類の着想が控えていてもおかしくはない。

大風呂敷をひろげて思想史的に言えば、原始仏教の「諸法無我」といった悟りはその一つの典型だろうし、そこまでの解脱は棚上げして近代以降の哲学に視野を限っても、近代の力学的世界像に典型的な因果的決定論からすれば、およそ行為は先行する脳神経状態・心理状態からの必然的帰結なのだから、意志作用についての余剰説・消去主義が導き出されよう。カントの批判哲学の主要課題のひとつは、現代風にいえば、まさしくこの消去主義の脅威への対処にあったし、「超越論的仮象」という彼のウルトラCは、決定論者のいう「幻想」説を先取りしていると見ることさえできよう。

この脅威は、現代では一層切迫的である。とりわけ、前世紀後半に行為の因果説が標準化して以降、意志作用説はもはや度し難い独断でしかないかのようである。これにかんしては、これまでも論じてきたので、ここ

では触れない<sup>6</sup>。本稿で問題にしたいのは、科学者の側からも、そうした随伴現象説・消去主義が声高に提唱されていることである。以下、そうした事態のほんの一断面について考えてみたい。

## 2. リベット（型）実験とその後

“脳が行動を決定しており、意志作用は幻想だ”とする言説に事欠かないが、この間しばしば引き合いに出されてきたのは、「リベット（型）の実験」である。そもそもの発端となった、脳神経科学を専門とするリベット（Libet, B.）による実験からすでに30年が経過し、脳神経科学者、心理学者、哲学者をまきこんで膨大な議論が重ねられており、その評価は専門家の間では決着ずみなのかもしれない<sup>7</sup>。しかし哲学徒をふくめ一般人のあいだでは、「意志作用が幻想であることは、リベットによって科学的に証明された」とする言説が、なお繰り返し見られるので、それを考える限りで一瞥しておきたい。もちろん、私は全くの素人なので、立ち入った議論はできないし、する資格もない。しかし、リベットの実験によって、ほんとうに「意志作用は幻想だと、科学的に明らかになったのか」ということについてだけ考えておきたい。

「指を伸ばしてほしい」と言われれば、指がマヒしていないかぎり、誰でも指を伸ばせる。他方、指を伸ばした人が何をどう感じようが、その人の脳波の変化は、時々刻々正確に観測できる。その際、脳の運動中枢から末端の筋肉細胞に向けて信号が発せられるのに先立って、脳中枢において特有の脳波の変化（準備電位 *readiness potential*）が生じる。このことは脳科学者のあいだで広く知られていたという。

そこでリベットは、時刻を十分の一秒単位で判別できる特殊な時計を用意して、被験者にこう頼んだ。いわく、これから肘を曲げてもらいたいのだが、曲げようと意図したときの時刻を覚えておいてほしい、と。こうし

た実験を重ねて、被験者の脳波（準備電位）が変化した時刻と、被験者が肘を曲げようと意図した時刻とを照合した結果、意図したときの時刻よりも、コンマ数秒ほど早く、準備電位の変化が起きていることがわかった、という。その後の多くの追試においても、リベットの実験と同様の結果が得られているとのことなので、この時間差そのものを否定する理由はなさそうである。

しかし、この実験は、かなり奇妙な印象を与える。脳波の変化（準備電位）のような客観的な出来事と、決断の自覚といった当人の心的出来事とを、はたして同じ時間軸で、どこまで正確に突き合わせうるのだろうか。前者の変化なら、観測装置の精度さえあげれば、百分の一秒、ミリ秒はおろかなノ秒単位でさえ観察できよう。しかし推論・考量・決断のように、当人の内観による以外にはその生起を認識できない、内観依存的な事象にかんして、客観的な観測と同じ精度で、内観的に時刻を特定できるのだろうか。

話をずらすようだが、ピッチャーの投球を見極めようとしているバッターを考えてみよう。ボールの接近にともなう脳の部位の変化かは、それこそミリ秒単位で正確に観察できよう。しかしバッターに対して、「見送るか・振るかの決断を下したら、その瞬間に合図してほしい」と注文したとしても、決断の時点をどの程度の精度で特定できるだろうか。もし、その精度がきわめて低かったら、いかに微細な脳波データが得られても、「ここ・この時点で、バッターは見送ろうと決断した」という仕方できき合わせることはできまい。

もう少し立ち入るなら、こうも問えよう。なるほど実験者は、脳波の変化を追いながら、準備電位についても、それに続く指令電位（command potential）についても、正確な時刻を特定できよう。しかし、そうした脳状態の諸過程と、考量・決断といった心的出来事との対応の仕方そのものについても、脳波計さえ読めれば、自動的に読みとれるとでもいうのだから

うか。

こう考えてくると、リベットの実験は、その設計において、かなり多くのことを、あたかも自明のように前提している。まず何よりも、実験の設計から所見の解釈にいたるまで

(前提1) 意志は、a. 時系列のある一点で作動し、b. その作動を当人が内観できる、  
と一貫して前提されている。そのうえで、つぎの二つが前提されている。  
(前提2) 意志の発動の自覚も、脳の事象も、原理的には同じように、その時刻を特定できる。

(前提3) 意志の作動と、それに対応する脳の事象は、1～1で対応する。

しかし、これらの前提は、それぞれに問題をはらんでいよう<sup>8</sup>。

これら三つのうち第一の前提は、リベット(型)の実験の根幹にかかわるので、それ以外を検討したのちに主題的に考察するとして、第二の前提から考えたい。そのために、この実験の流れを、実験者・被験者それぞれごとに時系列で書いてみると、こうなる<sup>9</sup>。

(観察者)	(本人)
	(時刻)
脳波の変化(準備電位)	$t_1$
	x 意志作用を‘自覚’
	y 時計に注目
	z 時刻を $t'$ と判断
脳波の変化(指令電位)	$t_2$
このとき、 $t' = t_1 + c$	

こう書き出してみると、「意志の発動は、準備電位の変化の  $c$  秒後だ」と



する所見への疑問もヨリ明確になってこよう。つい先程見たように、脳波の変化は、公共的に観察でき、その時刻も客観的に計測できるが、それ以外はすべて公共的には観察できない。そのうえで、それらは被験者が主観的に内観できるとしても、その時刻は客観的に計測できない。では、意志の発動は、当人なら内観できるのだろうか。仮にそうだとしても主観的には、求められている精度で、その時刻を特定できるのだろうか。これがそもその疑問であった。

議論を進めるために、かりにとともに「然り」だとしても、さらなる疑問が生じる。時刻  $x$  で意志作用を自覚してから、時刻  $y$  で時計に注目するまでに僅かとはいえ時間が経っており、その後、時計からの刺激が戻ったのち時刻  $z$  で時刻が判断されるまでも、やはり時間が経過している。これらの累計は、百分の数秒から十分の一秒程度なのかもしれないが、一定の時間が経過していることには間違いない。そうすると、被験者の記憶から取り戻された時刻  $v$  が、意志作用の発動の時刻であったとは限るまい<sup>10</sup>。

さらに言えば、そうした内観的な時刻の特定には、さまざまな個人差もありえよう。たとえば動態視力を考えてみると、外界から物理的には同じ入力があって、視覚中枢での反応の開始が同時刻だったとしても、いつ・何が・どう識別されるかは、馴染み、資質、訓練、加齢その他もろもろの要因によって、かなりのバラつきがみられよう。そうした分散は、日常的な時間スケールでは無視しうるとしても、百分の1秒単位のスケールでは無視できまい。そうすると、いかに精巧に工夫された時計を見るにせよ、意志作用を自覚した時刻の内観的特定にかんしても、個人間のバラつきはありえよう。そうしたバラツキが無視しえないとしたら、脳波の変化の時刻の客観的特定とはちがって、意志作用が自覚された時点と、本人が記憶し報告する時刻が、個人ごとにさまざまにずれている可能性もまた否定できまい<sup>11</sup>。

もちろん、そうであったとしても、リベットの実験にかぎっていえば、

件の時間差の観察は揺るがないのかもしれない。しかし、これ以上立ち入ることができないが、前提2は自明ではないし、したがって、これを自明視したままの結果の解釈には慎重であってよい。そう考えると、「リベットが発見したのは、意識的な意志決定には時間がかかる」ということだけであり、「0.3秒の“すきま”なるものは、実証されていない」とデネットが言うのは、個人差の可能性をも含めたうえで、案外、正鵠を得ているのかもしれない<sup>12</sup>。

そうしてみると、やはり一番問題になるのは、意志の瞬間的発動・その内観可能性という前提1である。これについては、先に「見送るか・振るか」というバッターの決断について考えたときの疑問が、そのまま持ちこされる。なるほど、日常的なスケールでは、その決断は「瞬時に」なされる。しかし、超スローで再生してみれば、意識的であれ無意識的であれ、心理状態の変化は、デネットも指摘したように、かなり幅をもった過程であって、決断が下された時刻をマイクロな一点に絞れるかどうかは怪しかろう。

それはあたかも山登りで雲の中に入っていくときに似ていよう。麓から仰ぎ見ていたときには、雲の境界は明確であった。しかし、いざ登っていくと、じわじわと霧が濃くなっていくだけで、いつ雲に入ったのかを特定できない。なるほど、霧の濃度の変化それ自体は、なんらかの物理的な尺度で客観的に測定できるだろうが、濃度変化のデータを前にして、ここ・この時刻で雲に入ったのだ、と言える一点を画定することはできまい。脳波の変化過程と、少なくとも意識的な心理過程との関係は、これと似ていよう。

にもかかわらずリベットが、彼の観測した時間差を論拠にして、「意志作用は、準備電位の変化からコンマ数秒ほど遅れて、後追いで生じるにすぎない」と主張したときには、

・意志作用は、特定時点で完結的に作動する、

・意志作用の発動は、当人に内観可能である、  
と主張する前提1が予め据えられており、そのうえで、脳事象と心理事象の1～1対応の存在を語る前提3にもとづいて、

・脳の準備電位の変化は、意志作用の発動と対応すると仮定されている。なるほど脳波の目立った変化があるたびに、それと対応する機能的・心的変化を指定することは理論的には可能だろうが、それが内観的に特定できる状態と重なる保証はない。準備電位の変化にかんしてこそ、これが重要となる。

こうしてみると、「脳による行動の指令と、後続する意志の発動のあいだに、コンマ数秒の“すきま”がある」のを発見した、というリベットの所見には、それぞれ多くの“すきま”がある。いま、実験それ自体には何らいかかわしい要素はなく、準備電位の変化と、被験者の自覚とのあいだには、客観的に計測可能・追試可能な時間差がある、としよう。しかし、そうだとすると、これを論拠にして意志作用の存在を否定できるとは限らない。意識的な意志決定には時間がかかるということは、たんに私たちの日々の実感にそぐうだけではなく、科学的にも何らいかかわしい知見ではなかろう。その点で、「リベットのパラダイム」は、「感覚-運動インターフェースを過大評価」し、「実行・監督の作用（executive and supervisory operation）が行われる、より緩慢な時間レンジを無視している」という批判は、正鵠を得ていよう<sup>13</sup>。

こうしてみると、リベットの实验が、“随伴現象説・消去主義の真理性の科学的事実”として受け取られたことのほうが、むしろ不可解にさえ思われてこよう。では、「“すきま”だらけの」の实验結果が、意志作用説にとって、そこまでの痛打となったのは、どうしてなのだろう。繰り返せば、そもそもの实验結果それ自体は、（時間的先行を「>」で表せば）、

準備電位 > 被験者による‘意志作用の内観’

というにとどまる。しかしリベットは、この結果を解釈するにあたって、

前提1（意志の瞬間的作動・内観可能性）と「準備電位＝意志の発動」という補助テーゼをもとにして、

脳による指令の開始 > 意志作用の発動

という所見を引き出し、これが一人歩きしたのである。しかしながら、この所見が、意志作用説にとって痛打となったのは、意志作用説によれば

脳による指令の開始 ≤ 意志作用の発動

でなければならない、とされていたからである。つまり、リベットの結果を痛打として受け取る側が、やはり暗黙のうちにそもその前提1を据えており、件の補助テーゼを認めていればこそ、準備電位の先行が痛みに激しくふれたのである。

### 3.

こう考えてくると、‘意志作用説はリベットの試験によって否定される’と受け取られるのは、そこで解されている意志作用説が、

- ・意志は、特定の時点で作動して、身体の変化を引き起こし、
- ・意志の発動は、つねに本人自身が内観できる

という前提を据えている場合だ、ということになる。しかし、そう考えて振り返ってみると、意志についてのこうした理解は、一部の酔狂な哲学者だけのものであるどころか、日々の常識のなかにも、かなり浸み込んでいる。

意図的な行為の本質を、意志作用に見る。これが行為の意志作用説であるが、その際に意志作用の働きは、しばしば、あたかも‘舟と船頭’、‘馬車と御者’さながらに、物質的な身体に精神が‘乗りこんで’、身体を操縦するかのようにイメージされる。このイメージは、デカルト的な、溯ればプラトンの物心二元論に由来する。ただし哲学史的に言えば、プラトンにおいては、馬車も御者も単一のプシュケーの部分機能のひとつであっ

て、一方が他方に“乗りこむ”とは想定されていないし、デカルトにあっても、心と体の関係は「舟と船頭」のそれとは違うとされているので、事情はもう少し複雑である。

しかし、この「馬車－御者」モデルは、意志作用についての考え方を強く誘導してきた。とりわけ、近代的な主客二元論のもとでは、主体と行為の関係は、「御者－手綱さばき－馬車」という、まさに廣松渉のいう「近代的三項図式」の枠組みで描かれ、ちょうど馬車が、乗りこんでいる御者の操縦によってはじめて合理的に動くのと同様に、人間の身体も、「意志作用」をつうじた自我による制御によってはじめて意図的行為を担うのであって、その制御が衰えれば、御者が振り落とされた馬車もさながらに、身体はどう動いていくか分からない、ということになる。そうなると、御者の手綱さばきにあたる意志作用が、一瞬で遂行され・認識可能であること、つまり先の前提1は、ほとんど自明となる。

このように「近代的三項図式」にしたがえば、行為主体は、外界を観察だけでなく、同時に、自らの内界をも内観する主観なのだから、前提2（脳波と心理の同時計測）もまたそのコロラリにすぎない。こうして「近代的三項図式」のもとで描かれる意志作用は、まさしく、リベット（型）の実験によって実在性を否定されるターゲットになる。こう考えると、皮肉なことに、リベットが件の時間差を論拠として意志作用をたんなる随伴現象として消去できると断じたときには、当の彼自身もまた「馬車－御者」モデルによって意志作用を考えていた、ということにもなる。

したがって、もっとも重要なことは、意志作用説を採るからといって、必ずしも“馬車－御者”モデルにしたがって、内観をともなった特定時点での制御作用を主張する必要はない、ということである。くどいようだが、要点はこうである。第一に、意図的行為における意志決定には「時間がかかる」のだから、ミクロな時系列の特定時点で完結的に遂行されるとは限らない。第二に、改めてフロイトに言及するまでもなく、いかに鋭敏な行

為者であれ、すべて内観的に自覚できるはずもないのだから、自覚できない脳事象が先行するからといって、意志作用が否定されるとは限らない。

第一の点はすでに見てきたので、第二の点について、少し考えてみる。これまで念頭においてきたのは、意識的な随意運動において遂行される意図的行為であった。しかし、冒頭で確認したように私たちの振舞いのうちには、不随意的反射によるものもあれば、“サブ・パーソナル”なレベルで処理されている随意運動によるものもある。これらは、それぞれに特有の脳活動に担われており、それらの脳活動は、意識的な意図的行為の場合とは違っている。しかし、いかに複雑な意識的な随意運動であれ、不随意運動やサブパーソナルな運動を担う脳活動が全く関与せずに生じているとは考えにくかる。そうだとしたら、準備電位の先行は、意識的な随意運動にとって特段の問題ではなからう。

要するに、思弁的な見通しではあるが、意志作用が、(1) 無意識的・準意識的な過程にも担われ、(2) 準備電位の変化といった単純な出来事よりも緩慢な、より多くの時間をかけて進行する過程だとすれば、リベットの結果自体は、意志作用説にとって何ら致命傷にはならない。そして、(1) (2) のように考える理由は、十分あるように思われる。

冒頭節で意図的行為を暫定的に特徴づけたとき、未来についての信念形成から実行にいたるまでび思考が、行為者自身の一人称思考として営まれることが本質的だ、ということを確認したが、右のように考えてくると、この本質的な特徴は、意志作用が(1) (2) の性質をもっていることと密接に関係している。

一人称思考とは、もちろん自己を指示した再帰的思考であるが、たんなる自己描写ではない。一人称思考はもちろん、自己描写を伴うが、それが主たる機能なのではない。より重要な機能は、異なる作用の統合である<sup>14</sup>。冒頭の例に戻って言うなら、魷の合目的な行動は、適正な個体分布の維持といった、特定の機能要件を充たす。そうした機能要件が、そのつと特化

されているなら、とりたてて統合の必要もなからう。鮎に「思考」を帰しうるとしても、鮎の行動を導いている思考は、機能的に特化された・無意識での一階の思考にすぎない。一人称での統合が必要になるのは、分裂・対立が生じて、機能要件の充足の営み全体が瓦解しかねないとき、である。機能要件が単一に特化されているなら、両立不能な因子が併起しても、つうじょうは当該の機能要件のもとで、それらの相殺・相乗をへてコンフリクトは解消する。したがって、自己指示的なメタな視点から現況を把握し調整する必要はない。

厄介なのは、複数の異なる機能要件のあいだでコンフリクトが生じるときだが、そうしたことは、動物でもさまざまにありえよう。そのとき下手すればパニックに陥って動けなくなるだろうが、動物たちには、コンフリクトを解消するメカニズムが、進化の過程を通じて生得的に備わっているように思われる。猟師のあいだで「狼ダンス」と呼ばれてきた不思議な振舞いなども、その一つであろう。しかし人間は、そうした生得的な調停メカニズムだけではコンフリクトを処理できないまでに、入力が多様化し複雑化してしまっており、そのつど比較・考量し選択することを余儀なくされている。そして、それこそまさに一人称思考に固有の機能であろう。

こう考え進めてくると、「決断という意識的な心的出来事の生起は、相互に独立なさまざまな神経的出来事の膨大な集まりが、ある特定のパターンの遠心的活動に収束するように、・・・それら神経的出来事を調停 (coordinate) する役割を果たしている」という、リベットの実験をふまえた提案は、たいへん説得的だと思われる<sup>15</sup>。要約的に言えば、「脳と心の異なった部分あるいは領野に分配された、関連する情報と過程が統合されるために、それら諸部分・諸領野を横断したコミュニケーションを容易ならしめる」ところに意識的思考の本領がある、という所見は、正鵠を得ている<sup>16</sup>。

意志作用とは、振舞いにいたる諸因子が、一人称思考のもとで関連しあっ



て、認識と異なる能動性を形作っていることを総括的に特徴づける概念だ、という趣旨の特徴づけを私は冒頭で掲げたが、ここに到って振り返るなら、次のように言えよう。肝腎の一人称思考とは、魷の攻撃行動を導いている、機能的に特化された無意識での‘思考’とは異なって、さまざまな機能要件をいわば横断した高階のメタな思考であって、個々の機能要件の充足に還元できないし、消去もできない。意志作用は、そうした一人称思考の構成的アспектなのである。

これは事の半面にすぎず、そのように捉え返された意志作用が、従来想定されていた因果的実効性を、どう確保できるのかという、もう一つの大問題が控えている。しかしここでは、意志作用説が、この間蔑視されてきたほど荒唐無稽な行為論でもない、と述べて終えたい。(この章、完)

- 1 他のようにもありうるという選択的可能性 (alternative possibility) の信念は、理由概念にとって構成的だということを Haji, I. *Reason's Debt to Freedom*, 2012, Oxford U.P. は強調しているが、決定論を前提すると Velleman のいう「認知的自由」に該当する。
- 2 Ohba, T. 'Self-knowledge and Moral Agency', *Philosophia OSAKA*, no. 5, 2010.
- 3 現代では 'volition' は 'trying' とも言い換えられて、O'Shaughnessy や Hornsby に見られるように、かなり限定的な心理作用を指すことが多いが、ここではイギリス経験論からデカルトに及ぶような最も広義で用いている。
- 4 普及している呼称は、'Volitionism' だが、「行為の因果説」と対比させるために Moya, C. *The Philosophy of Action*, 1990, Polity の用語を借りた。
- 5 デイヴィッドソンは、それを何とか欲求・信念のペアから成る、行為の理由の暫定性の問題に回収しようと努めるが、やはり「自制」に訴える。Davidson, D. *Essays on Actions and Events*, 1980, Oxford U.P., ch. 2, ch. 5.
- 6 大庭健「乖離していく主体——行為の因果説の帰趨」、『専修人文論集』93号, 2013。「行為主体の関与——因果説の空隙」、『生田哲学』16号, 2015。
- 7 Libet, B. 'Unconscious cerebral initiative and the role of conscious will in voluntary action', *Behavioral and Brain Sciences*, 8. 1985, *Mind Time*, 2004, Harvard U. P., 邦訳『マインド・タイム』岩波書店二〇〇五。
- 8 最もコンパクトには、たとえば Baumeister, R., Mele, A., and Vohs, K. (eds.) *Free Will and Consciousness*, 2010, Oxford U. P. 所収の諸論文, Dennett, D. *Free-*



- dom Evolves*, 2003, Viking, Ch.8, 邦訳『自由は進化する』NTT出版, 二〇〇五など。非常に突っ込んだ批判の試みとしては, Mele, A. *Free Will and Luck*, 2006, Oxford U. P., *Effective Intentions: The Power of Conscious Will*, 2009, Oxford U. P.。日本語でのもっとも簡潔なものとしては, 古田徹也『それは私がしたことなのか』新曜社, 二〇一三, 四二頁以下。
- 9 メレは, 「E - 時刻, C - 時刻, B - 時刻」と呼んで整理している。Mele, A. 'Conscious Deciding and the Science of Free Will', 2010, Baumeister et al. 前掲書所収, p. 49.
- 10 デネット前掲書, Mele 前掲書参照。
- 11 Haggard, P. などがそうしたバラツキを精密に検証しているという。Mele 前掲論文, p. 49以下。
- 12 Dennett 前掲書, 邦訳 三三三頁, 三三〇頁。
- 13 Donald, M. 'Consciousness and the Freedom to Act', Baumeister et al. 前掲書所収, p. 11。
- 14 カントによれば 'cogito' は「総合」つまり有意義な思考が可能であるために思考がとらざるをえない形式である。
- 15 Lowe, E. *Subject of Experience*, 1996, Cambridge U.P., p. 83-84。ただし彼は, 決断の因果的作用を明確に否定しているが, この点はもう少し考える必要があると思われる。
- 16 Baumeister, R. 'Understanding Free Will and Consciousness on the Basis of Current Research Findings in Psychology', Baumeister et al. 前掲書所収, p. 32。